市仏連会報

発行所
横浜市中区大平町96
光明山西有寺内
横浜市仏教連合会
電話045（661）0166

年頭にあたって

横浜市仏教連合会
会長　滝川覚道

穏やかな新春を迎え、市内寺院御住職を始め御寺族の皆様益々御健勝にて二利御双修のこととお慶び申し上げます。

昨年は変革の年と云われ、政財界の混迷に天災まで重なり、どちらを向いても不況の波は厳しいことでした。今年は早く立ち直って明るく希望の持てる年にしたいものです。

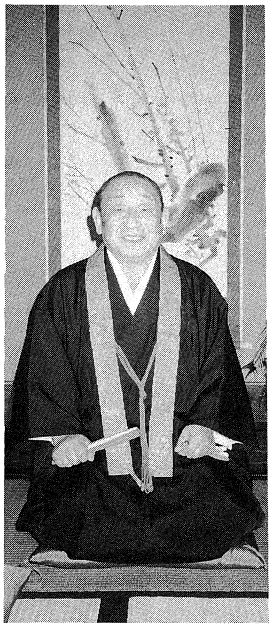
昔から「禍福はあざなえる縄の如し」といわれていますが、禍いを避けて福は訪れないようです。禍いに立ち向って禍いを乗り越えたところに福があるのではないでしょうか。

涅槃経に功徳天と黒闇天の比喩があります。美しく着飾り福徳をもたらす姉と襤褸をまとい不幸を呼ぶ妹が常に連れ立って歩き、離れることがないと云う、相対矛盾禍福輪廻の此の世だからこそ、思慮を廻らし、時には果敢な行動も自重の忍耐も必要となるのでありましょう。

大晦日のテレビで梅原猛先生を中心とする京都の六賢人（六奇人）による座談会が放映されていました。

共産主義の崩壊は民主主義が勝利して更に拡大するのではなく、寧ろ競合の相手を見失い、つっかい棒がはずれたように活力を失うことにつながる。とか、利益追究の自由経済はすでに限界に達している。個人の利益が相手の利益につながるものでなければ、これからの国際社会には通用しない。仏教でいう自利・利他の利他を先行しなければならないことが強調されていました。

大乗仏教では菩薩道を大事にします。「菩薩の用心は慈悲をもって本とし、利他をもって先とす。」と示されているように、慈悲の心を根底に据えて利他行を実践しなければなりません。先づ身近な壇信徒のニーズに応えられるよう、慎重にそして前向きに教化に専念したいものです。

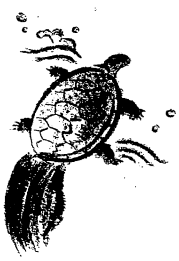


さて、横浜市仏教連合会は皆様の御理解と御協力を頂き、お陰様で順次活動の輪をひろげて参りました。

南区新善光寺に於ける昨年の涅槃会は二月十一日盛会裡に勤めることが出来ました。釈尊御生誕の花まつりも四月始め各区仏教会を中心に年々盛んになり、六月には第十回春の仏跡参拝として、興津の臨済宗清見寺及び清水の日蓮宗龍華寺に参二百十五名の参加を得ました。その他県慰霊堂の奉仕市釈尊奉讃会の助成協力。会報の編集、又十一月には奉讃会と共催、知覧、長崎慰霊の旅を八十名参加して実施しました。その際雲仙のホテルで普賢岳披災者の義援金をお願いしたところ、十九万四千円の拠金があり深江町役場へ寄托しました。温い善意に更めて御礼申し上げます。

この様に多彩な行事を執行することができましたのも諸役を始め会員皆様の御尽力の賜でございまして深く感謝申し上げる次第でございます。

尚今後共市仏への御意見要望等お寄せ頂き、更に区仏内の年中行事や冠婚葬祭のニュース等もお聞かせ頂き、会報の充実を通して、理解と協力の輪をひろげて頂きますよう御願い申し上げまして、新年の御挨拶とさせて頂きます。



謹賀新年

横浜市仏教連合会

名誉会長　梅田信隆
顧問　志村慎吾
顧問　柳下隆侃
顧問　森山正城
参与　福永隆昭
参与　横山敏明
会長　滝川覚道
副会長兼会報編集指導　玄野孝善
副会長兼専務理事　川上敬吾
会計　橋下賢明
税務委員長　斎藤隆法
墓地委員長　奈良光雄
会報担当理事　備前恭忍
監事　野沢隆幸
監事　内野公雄
他役員一同

九州慰霊の旅で平和を祈誓

十一月二十四日～二十六日　知覧と長崎へ

横浜市仏連副会長
長昌寺住職　玄野孝善

新年を迎えて。昨年中は何かとお世話になり、厚く御礼申し上げます。本年も相変らず市仏連と釈尊奉讃会等の活動、行事にご協力を宜しくお願い申し上げます。

さて、昨年の十一月の下旬に横浜市仏連と釈尊奉讃会によります戦没者慰霊法要に九州の知覧特攻平和観音堂におもむきました。海照寺、東照寺、西蓮寺、高松寺、観音寺、保福寺、宗川寺、徳善寺、西福寺、厚木市の安竜寺、清源院、そして長昌寺からも十名、総勢八十名の方が参加してくださいました。滝川会長、柳下顧問、程木奉讃会幹事を始め住職、寺族、檀信徒、奉讃会々員等の御参加おまいりをしていただきました方々には、心から厚く御礼申し上げます。

知覧平和観音堂にて慰霊供養

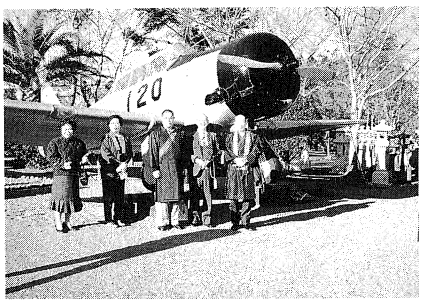
到着後まず、平和観音堂で読経そして観音寺様と梅花講様各講によりまして御詠歌を奉詠していただき、戦没者の慰霊法要をすませました。その後、資料館等を拝観しました。

そこには、当時軍隊の使用した遺品などがありましたが、なかでも神奈川県や東京都、埼玉県等、全国の当時特攻隊であった十八歳から二十三歳までの若者の写真が千何人とパネルになっていました。説明によりますと、日本はすでに物資や食糧も無く大変な時代でした。その時、その特攻隊員は三角兵舎といって、おそまつな建物で三日間すごし、赤飯やお酒のもてなしを受け、最後の晩に父母あてに手紙を書き残しました。その中の五～六通を読んでみましたら、こんな事が書いてありました。

「お父さん、お母さん、まもなくお別れです。僕はお国のために元気よく戦ってきます。お国のために僕の命を捧げることは少しも惜しくありません。しかし、僕をここまで育ててくださいましたお父さんやお母さんに何も恩を返すことができなかったことは真に残念です。お父さん、お母さん、ゆるして下さい。どうか、いつまでもお元気で長生きをして下さい。さようなら。」……そして翌朝片道の燃料しか持たない飛行機に乗って南の空に消えていったのです。

戦争とは実に悲しいことです。今回はそういった人達の慰霊供養に出むきまして今の日本は平和でありがたいとつくづく感じました。

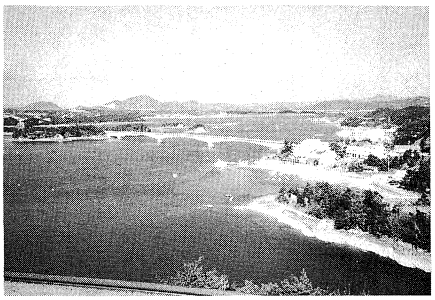
「親孝行をしたい時には親はいない」と申しますが、最近の若者は「親孝行をしたくないのに親がいる」なんてことをいっています。平和な世の中になりますと、義理とか恩とか人情とかが次第に薄れていくのでしょうか。人は皆、助け合って生かされているものです。それが無くなってしまったら、四悪道の世界へ人は迷い込みます。それぞれの人を尊敬して和合の世界を築き上げなければなりません。



知覧の戦闘機

さて、九州の旅も最後の日は長崎におもむきました。曹洞宗の皓台寺で早朝勤行を致し、法話を拝聴しました。眼鏡橋、大浦天主堂、グラバー園の見学の時、やはり「長崎は今日も雨だった」の歌詞どおりの天候に遭いました。

長崎ではアメリカ軍が投下した原子爆弾により七万人もの尊とい人達が亡くなられてしまいました。仏教会ではその爆心地に生花と香をたむけ、知覧と同様に読経をし御詠歌を奉詠し御供養してまいりました。その後、平和公園にあります資料館を拝観いたしました。そこには当時、爆風で飛んでメチャメチャになってしまった浦上天主堂の写真や大火傷をしている赤ちゃんにお乳を飲ましている母親の痛々しい顔、さらには全身大火傷で死んでいる人、それはまさに地獄図を見ているようでした。私は高校生のころ物理学が大好きでしたので、こんな偉大な破壊力を持つ原子爆弾とはどんなものなのかと、実物大の模型を見ました。すると何と、家庭で使用している大型冷蔵庫くらいのものでした。こんな小さなものがどうして大きな破壊力を持つのだろうと、更に説明書を見ますと、原子爆弾の型はちょうど卵のようで、その卵の黄身に当る部分にプルトニュウム二三九が壁によって仕切られています。このプルトニュウムが、仕切られている壁を取り除くと臨界量に達し爆発をするというものです。その壁を取り除く役をする一次火薬が黄身の周りにあり、中が爆発すると、更に外側にある二次火薬が爆発するというものです。そのエネルギーは約三千度という高温が一秒、そして一千度が五秒続くというものです。地に在るものを物凄い勢いで巻き上げ、高度な放射能が含まれてしまいます。これが原子爆弾で重さは四・五トンだそうですが、火薬に換算しますと二百二十五トンにも匹敵するそうです。ですから破壊力は鉄砲どころではありません。こうして長崎の町は一瞬にして破壊されてしまい、尊い人命も数多く失ってしまいました。長崎県に住む或る人の日記によりますと、私は農家ですから、いつものように裏の畑で野菜の手入れをしていましたところ、突然ピカ！っと光が輝いたと思ったらドドドンという音がした。いったい何なんだろうと思い、家のほうを見ると我家が燃えているではありませんか。こりゃ大変、火事だ、とすぐ火を消そうと思い、立ち上がったが腰がたたない。困ったと思っているうち自分の衣服



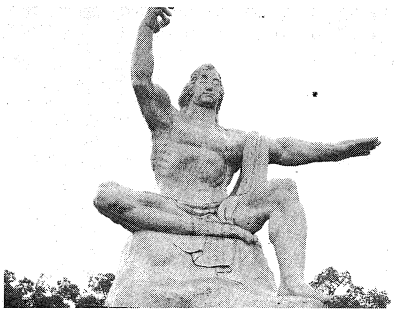
天草五橋パールラインの景色

が燃えだしてきた。すぐに衣服を脱いだら、体の皮膚がむけて赤裸になってしまい熱くてたまらない、火傷だと思いすぐ近くの川に飛びこんだ。そして、急いで病院に行こうとしたが、辺り一面焼けただれの瓦礫の山だ。その後、黒い色をした雨が降った。自分は気を失い何うなったか覚えていない。しかし、自分は周りの人よりかるかったようだ。気が付いたら、知らぬ人達が助けてくれていた。だが、黒い雨にあたった人達は、その後、白血病や癌に苦しんで次々と死んでいった。私も今、白血病と闘っている。この黒い雨というのが、実は放射能を多量に含んでいたのだ。……という日記を見ました。何と悲しいことでしょう。長崎の市大病院には今なお、こういった患者さんが入院しているそうです。

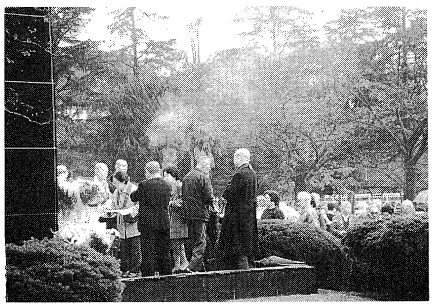
戦争はもう否だと訴えています

長崎市皓台寺にて勤行

が、戦後生れの若い人達は戦争の怖さ悲しさを知りません。戦没者の慰霊法要をしても、お詣りに来る人が年々少なくなってまいりました。戦争の苦しみ、悲しみ、怖さを知ってはじめて、本当の平和が大切であるということができるのでありましょう。そう思えば日本は、戦争はしてはならない、平和のありがたさというものがわかるのだと思います。そして私たちはここまで来たのですから今、普賢岳の噴火で困っている方々にと募金箱を作り、我々の気持を深江町に寄付して、長崎を後にしました。（長昌寺寺報『心のまど』新春号より加筆訂正して転載）



長崎平和記念像



長崎平和公園原爆落下地点供養

原爆落下中心地点で詠歌供養

理事会・常務理事会の報告

平成五年十二月十一日、於桂月。

午後五時よりの会合に二十名が出席された。川上敬吾副会長兼専務理事が司会し、滝川覚道市仏連会長が活動をふり返って感想を話す。釈尊奉讃会の慰霊の旅で九州の知覧特攻飛行基地跡の平和観音堂と長崎の原爆投下中心地へ行き、ご供養を申し上げた。胸の詰まるような厳しい、重苦しい思いで一杯になった。光をみるという心の観光企画が参加者より高く評価されていた。うれしいことである。

涅槃会は戸塚区当番で会処は高松寺様である。趣きのある立派な寺で、区仏諸役も熱心に取り組んで下さるので大勢の参列をお願いする。市仏連活動も少しづつ浸透して喜ばしいが、某区では市仏連とは何なのかといって無関心の向きもある。要望と寛ぎの場として会合を持ちたい。

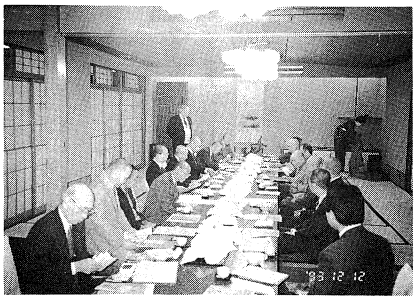
戸塚区仏会長の西尾師が涅槃会実施準備について報告する。十一月に市仏連諸役と会席し、十二月十五日に戸塚区仏総会で詳細を決定する。前例にならい責任を果したい。平成六年二月十一日（金・友引）、会場は高松寺。戸塚駅西口より徒歩五分、長後街道矢沢交差点の近く。講師には八王子市の臨済宗南禅寺派の梅洞寺住職の富岡琮博禅師にお願いした。

墓地問委員長奈良師、税務問委員長斎藤師が発言。何とか年度内に会合を開きたい。

平成六年の春の仏跡参拝の件。ビーエス観光の真川氏提示の五案を検討し、東京都庁、芝の増上寺、巣鴨のとげぬき地蔵への参拝を決定。六月八日（水・友引）実施。

釈尊奉讃会の件。程木事務局長が現況説明し会員増加と運営人事の面で市仏連の強力なテコ入れが不可欠であるとして協力を要請。

県慰霊堂奉仕当番日程報告と平成七年の涅槃会は第二十回目で鶴見区仏が当番である。会議終了。



出席者ご芳名。福永隆昭師、柳下隆侃師、滝川覚道師、関水宗孝師、鷲雄興勝師、斎藤隆法師、八木良純師、守長尚文師、楠正舜師、程木徳明師、森岡隆沖師、都築哲信師、西尾俊雄師、奈良光雄師、玄野孝善師、川上敬吾師、橋下賢明師、遠藤隆也氏、真川明氏、備前恭忍師。引き続き懇親会となり、来賓の県仏会長福永師、市仏連顧問の柳下師、当会顧問弁護士の遠藤様の各位より祝辞をいただき、納会を和やかに過した。

支部だより

保土ケ谷・旭区

会報に毎回掲載されている『支部だより』で、各区仏がそれぞれの地域に即した、特色のある活動をしておられる様子を、興味深く拝見し、そのご努力に敬意を表している。

当仏教会では、当時の仏教会長であった安井覚明師（保土ケ谷区和田・真福寺）の発案で、昭和五十九年十二月十八日に、区仏としての「第一回歳末助け合い托鉢」を、相鉄線の和田町、二俣川駅頭で実施した。

以来、平成五年十二月二十二日の第十回まで、区仏の年中行事の一つとして定着し、十二月中下旬に托鉢が行われ、集められた浄財は、毎年（神奈川新聞厚生文化事業団）に寄託されている。

区内寺院方の協力により、托鉢の場所はJR保土ケ谷駅、相鉄線の天王町、鶴ケ峰、二俣川、希望ケ丘の各駅に拡がり、また、『保土ケ谷旭区仏教会歳末助け合い托鉢』の幟旗、網代笠、浄財箱等の用具も逐次整備され、募金額は年毎に増加してきた　平成五年度には、子供たちにも親しんでもらおうと、可愛らしい一休さん（？）のイラストの看板も登場し、好評を得た。近年は区仏恒例の『釈尊成道会』勤修の折に、参集した区仏教奉讃会員にも協力を呼び掛けて成果をあげている。

この十年の間には、雨天の日もあった。北風の冷たい日もあった。年末の僅か一日の、短い時間の托鉢ではあるが、各宗各派の寺院方が揃って寒い駅頭に立つことによって、地域の人々に対し、我々僧職にある者も、社会福祉のために積極的に尽していることをアピールすると同時に、『布施』の心を喚起することを願って始められた行事であるが、実際に駅頭に立ってみて、逆に我々にも色々と教えられることの多い行事であると思う。

歳末助け合い托鉢

港北区

港北仏教会では、四月に妙蓮寺様の釈迦堂をお借りして、恒例の花祭りを厳修致しました。幼稚園児の白像のおねりとご詠歌、紙芝居、奇術等で盛会に終りました。六月には税務署の方と税理士さんをお招きして税務研修会を開催いたしました。出席寺院から熱心な質疑応答がありました。七月には、鶴見川花火大会の一こまとして、灯籠流し供養を修行いたしました。今年は潮の流れ、風向に恵まれ夕ぐれの水面に区仏の寺院の読経の中に一千余灯の灯籠が、各家の先祖の諸精霊の霊安かれと、水面に映える中に終了いたしました。ご随喜くだされた諸大徳に厚くお礼申し上げます。

金沢区

金沢区仏教会では次の事業を執り行った。九月十一日、仏教文化講演会開催。講師　松原哲明師、笙の演奏　宮田まゆみ先生。十一月六日　禅林寺住職　退董式　新住職普山式　会長　副会長釜利谷地区寺院出席。十一月八日　県仏教会成道会厳修　薬王寺　宝樹院　持明院出席。十二月一日　横浜市社会福祉協議会より表彰される　交通遺児寄付により。会場　関内ホール　十二月四日　税務研修会開催　講師　税理士　細渕慎一先生。会場　六浦の金龍院　十二月十一日　区仏理事会　文化講座収支決算報告　交通安全祈願　法要収支決算報告　税務講習会収支決算報告　涅槃会　花祭り　その他。会場　六浦の光伝寺　平成六年一月一日　教化新聞「慈光」（九十一号）新年号発行　一月十五日　区仏新年総会　各行事の決算報告　協議事項は涅槃会や花祭りについて。会場　金沢園　一月二十五日　釈尊奉讃会新春参拝一泊旅行　仏閣参拝と三谷温泉　六十六名参加　寒厳の季節にも係わらず暖かく好天に恵まれた。一月二十五日　県仏第二回理事会並びに賀詞交換会。宝樹院　持明院出席。会場　華正楼

緑区

緑区仏教会では、去る平成5年11月29日～12月1日までの二泊三日の日程で、「丹後半島若狭路と三方レインボーライン」と題し、NHKの朝の連続ドラマ「ええにょぼ」の舞台、「伊根の舟宿」「国宝明通寺」の仏跡参拝旅行を行ないました。

参加人数は、当初、バス一台40名位を目標に募集しましたが、会員各師のご助力により、男23名、女46名の合計69名参加者が集まり、事務局としてはうれしい悲鳴となり、バス二台で出発しました。

第一日目は、緑区各地を朝七時に出発し、東名、名神、北陸道と高速道路を進み、梅丈ケ岳展望台より三方五湖を見学、小浜温泉にて明日の英気を養いました。習日は、宿を8時に出発、国宝の明通寺に参拝をした後、舞鶴を経て、日本三景天の橋立を傘松公園より「またのぞき」をし、今回の参拝旅行のサブタイトル、伊根の舟宿を海から見学をし、連続ドラマのタイトルバックで毎朝見ていた景色と同じ場面が見えると幾度となく歓声が上った。参拝旅行の最後の夜は城崎温泉に宿を取り、カラオケはもちろん歌あり舞ありで最後には宿の仲居さんまでもが入っておどりの輪が出来て大宴会となってしまいました。

三日目は、宿を8時に出発、山陰の小京都、出石町の町並を、地元の名ガイドさんと共に散策し、まだ朝食をたべて間もないのに「出石そば」をたべる人などそれぞれに時間をすごしました。帰路には山陰の新鮮な魚やカニを、土産に買い、大阪の万博公園レストランにて昼食をとり、午後9時に緑に帰って来ました。今回の緑区仏教会仏跡参拝旅行は、緑区分区前でもあり、参加者からは、区仏がもし分れても、今回の様な仏跡参拝を続けてほしいとの声もあり大変好評のうち無事に終ったことを事務局一同うれしく思っております。

瀬谷区

当区は横浜市の西端に位置し、人口十三万位が居住し、南北に長く、よくサツマイモの形に似ていると語られる。その中央を相模鉄道が東西に横切っていて、三ッ境と瀬谷の二つが最寄駅である。

区内には八ケ寺と一堂があり、仏教会と八福神会を構成している。おかげさまでまとまりがよく、何かと親睦を深め地域仏教の興隆と発展に努めている。

瀬谷駅近くの相沢に臨済宗建長派の相沢山長天寺がある。昭和六十三年二月に市仏連の第十三回涅槃会の会処ともなった。平成五年十月十日に本山の鎌倉建長寺より管長禅師様を導師と迎え、開創六百年の祝典を催された。管内寺院僧侶六十名による本堂内での観音経読誦行道法要は圧巻であった。開創は応永元年（一三九四年）二

月十五日。開山は宝林宗薫大和尚禅師、開基は平本六兵衛である。現住職の三田裕道和尚は十七世である。初代と二世の間には二百三十年ばかりの空白がある。二世から十七世の現住までは連綿と法脈が継続し、地域住民の心のよりどころとして信仰を集めている。管長猊下が祝偈『開創六百年拈香請建法幢相沢嶺　師檀共契拓真田長天夜々清輪月　照徹無辺六百年』を音吐朗々と諷誦された。本堂から外を見ると去る四月に落成披露が済んでいる新築の客殿、庫裡の偉容が目に入る。招待されて区仏の各尊住と法要式典に随喜し、拝聴、拝見をしていて、六百年間も法灯を守り、禅風を起こし教化し、諸堂を建て直し維持をすることは、大変なことだなあ、よくやられたなあと感心した。本当におめでとうございますと祝意を申し上げた。

区仏では例年の如く、歳末募金に協力し、善意銀行へ寄付をした。十二月に納会をし、今年の一月十三日には新年総会を開き、いろいろと協議をした。

栄区

栄区支部だよりは、分区以来区内十四ケ寺の縁起・由緒を書くという会長の方針です。従って今回は光明寺について報告致します。

光明寺は浄土真宗本願寺派で、栄区上郷町の環状四号線に面しております。寺の縁起によれば、往昔聖徳太子の寵臣、秦川勝が同郷の小菅ケ谷出立川の辺（現本郷台駅前）に草創した仙福寺に始まるといいます。当初は法相宗で、その後、平安期に天台宗となりましたが、鎌倉時代のはじめ、執権北條泰時が北條政子の十三回忌に鶴岡で行った一切経校合の折、親鸞聖人が参加され、時の住持了恵もその席に連って聖人の学徳にうたれて帰依し、法名を了心と改めて真宗に改宗したと伝えます。この寺には古く聖徳太子の像が安置されていましたが、或る時この像が堂内から消え、住侶が処々をさがしていたところ、出立川の艮の方の山中で、梅の香がし、夜な夜な光明が輝やくとの話を聞き、たずねてみると太子像があったという伝えの尊像でした。

後、五代執権北條時頼の母、松下禅尼がこの地に隠居され、像の奇瑞の事を聞いて、この像を深く信仰されていたので、禅尼の死後時頼が仙福寺を隠居所の地に移して、山林竹木等を寄進され、太子像の故事によって、梅沢山仙福院光明寺と命名されたといいます。

その後、北條一族有縁の寺として運営されましたが、幕府滅亡の時には焼き打ちにあい、他所に避難しましたが、後、復旧しました。

戦国期、小田原北條氏により領内の真宗が禁制された時、禅宗に変り、真宗の分は他所に避難したりしましたが、解禁とともに旧地に復し、真宗念仏の道場として今日に至っています。慶安二年（一六四九）徳川家光から朱印状を受け、鎌倉幕府由緒の寺として明治迄代々の将軍から十三石の朱印地を許されていました。

寺の年間行事の主なものは

○修　正　会　一月　一日
○春季彼岸会　三月二五日
○総永代経　四月二五日
○盂蘭盆会　八月　八日
○秋季彼岸会　九月二三日
○報　恩　講　十月二四・五日
○除　夜　会　十二月三一日

他に毎月二五日に定例法話会、毎月二十日に勉強会、偶数月第四土曜日に仏教壮年会例会、毎月四日に仏教婦人会例会を開催しています。又、毎月一日・八日・十二日・十日・十五日の夜、門徒の家で「お寄講」という法座がつとまり、各々十数名から二十数名が参加して、勧行と法話が行なわれています。これは江戸時代からの慣例ですが、会所が門徒の家を持ち廻りで行なわれており、古い宗教的習俗を現代に残している点に特色があります。尚、毎月一日に寺報「光明」を発行し、現在一〇八号となりました。（北條祐勝記）

泉区

横浜市の西北部、霊峰富士を仰ぐ街、泉区上飯田町に「柳明（やなみょう）」という地区がある。歴史は古く三百年の昔より、今日まで、住む人々のささやかではあるが、根強い、共に生きるという絆の信仰の集い「大般若祈禱会」が、今もなお脈々と受け継がれ、講員三十数戸の持ち廻りで、毎年一月十八日に開催されている。

何時の頃つくられたかが不詳ではあるが、「大般若波羅密多経六百巻」は朽ち、その影をとどめているのは百巻余りである。伝承されたその経巻を大切に、当番家に保存され、次の年の当番家へと移送されている。

毎年当日、早朝より当番家に集まり、それぞれ持寄った収穫の野菜を調理して供える。そして行者（新橋、観音寺住職）の大般若理趣分読誦に始まり回向で終る。それから行者の年頭法話を聴聞（ちょうもん）する。講員数十人で真心こめて作られた野菜の珍味を、来会者一同でいただきながら、この一年の国土昌平、五穀豊穣、家内安全、諸願成就を祈願する仏教行事が、「ゆめはま2010プラン」の行動計画のはざまで、永い伝統を守りつつ、心静かに楚々として伝承展開されている。貴重な講行事である。講員は地区の共同体で構成されているので、行者寺（曹洞宗）の檀家ばかりではなく、菩提寺は異なっている。

菩　（曹洞宗　観音寺住職　梅田文丈・記）

第十一回春の巡拝

平成六年六月八日（水・友引）実施

増上寺・都庁・とげぬき地蔵

横浜各地を早朝出発、芝の増上寺参拝、（昼食）、東京都庁見学、巣鴨の高岩寺（とげぬき地蔵）をバスで日帰り参拝旅行をする。会費は八八〇〇円也。申し込みしめ切りは五月十五日とする。よろしくご参加下さるよう、檀信徒様におすすめいただきたい。

横浜市釈尊奉讃会よりのお願い

新会員の募集！

本年も皆様のお力をお借りして、さらに会の充実をはかり、「釈尊のみ心」を拡げたいと存じます。入会は二千円、年会費は千円です。入会された方には「わげさ」と「バッチ」又は「ペンダント」をお送りします。御住職を始め御寺族の方々も奮ってご入会下さるようお願い申し上げます。そして、どうぞ新会員をおさそい下さい。

問い合わせ、連絡先は事務局迄。

〒二二二三　港北区綱島1の13の15
東照寺内、横浜市釈尊奉讃会
電話　五三一―一七八三
振替横浜（三）四〇二一三

県慰霊堂出仕当番

六・四・十一　西区仏教会
六・六・五　磯子区仏教会
六・十・五　港北区仏教会
六・十一・五　金沢区仏教会
七・二・五　中区仏教会
七・四・九　保土ケ谷旭区仏教会

第十九回釈尊涅槃会挙行

於　戸塚区高松寺　一五〇名参集

第十九回涅槃会会場

市仏連恒例の涅槃を平成六年二月十一日（金・友引）に開催した。今回は戸塚区仏教会が当番で、会場を戸塚町四八四六番地の臨済宗円覚寺派の潤岳山（かんがくさん）高松寺（こうしょうじ）とした。南北朝時代の創建の由緒ある寺院で、寺山を背景とする禅庭、境内に立ち並ぶ諸堂の趣きが深く良く、すばらしい。寺名にふさわしい老松が枝振りも見事に数樹そびえ、数本の古木の紅白梅が点在。少し花開くかして馥郁の香りが淑気を漂わせる。一時半に総桧鐘楼門の二層に吊るされた『報恩』の梵鐘が打ち鳴らされ、雲林寺講中の入堂ご詠歌の中を導師、武衆ら十二名が本堂へ入る。総合司会進行は市仏連副会長兼専務理事の川上敬吾師。開式の言葉を市仏連副会長の玄野孝善師がのべた。一同三礼、導師酒水加持。三帰依文唱和、導師の市仏連会長滝川覚道師が表白文を諷誦し、戸塚区仏教会式衆の発音で観音経を全員読経し焼香回向を涅槃図本尊に捧げた。雲林寺講が大聖釈迦如来涅槃和讃を奉詠。「…（略）いましずかに、しゃかむには、はかなくくもに、かげりゆく、はらはらちりて、すべもなし、おこたるなかれ、もろびとよ、ねはんのまなこ、とじたもう。」回向文。三礼、退堂。約三十分間の法要終了。

式典は滝川市仏連会長の挨拶で始まる。市釈尊奉讃会会長宇野氏の代理で程木徳明事務局長が入会案内を申された。戸塚区仏教会々長で会処の高松寺住職が寺の由来と当番区仏としての取りくみ経過を話され、講師の高岡老師を紹介されて、講師登場、法話となる。

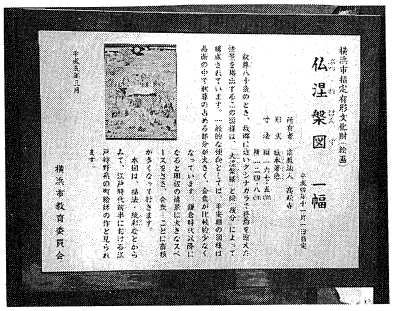
講演後、川上司会が「持つという字は手扁に寺と書く。心のすなおさをお土産としてお持ち下さい。」玄野師が「富岡老師にはご法話をありがとうございました。皆様も寺で照る照る、帰りは曇り、家に着いたらドシャ降りにならぬように」と、閉会の辞で散会となる。

高松寺鐘楼門

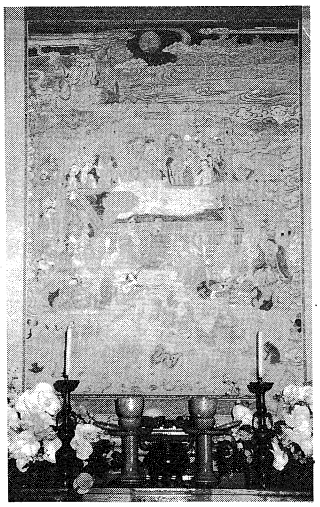
西尾住職の挨拶「当寺は開創六三〇年余りの歴史があり、ご本堂内陣に掛けました涅槃図は江戸時代前半の狩野派系絵師の作で平成四年に市の文化財に指定された。これまでは二月十日に出していたがお詣りの人はわずかでした。当区仏の花まつりは盛大、成道会は僧侶のみの修行。市仏連涅槃会当番会処となった記念に当寺蔵涅槃図のテレホンカードを作り、供物として皆様にも配布します。今日の講師は円覚寺僧堂修行同期の老師を仲立ちとしてご縁ができた八王子市の臨済宗南禅寺派布教師で梅洞寺住職の富岡琮博禅師であります。ご静聴いただき、心の糧となれば幸甚です」。

二時四十五分から約四十分間、静かな語り口の中にも強調すべき箇所は大音声であったり、繰り返されたり、例話も判り易くて富岡師のねはんえに因んでの法話は参集一同の心にしみ入るようで感銘深いものであった。『横浜市仏教連合会が宗派を越えてメインエベントの釈尊涅槃会を実施される。あらゆる角度から説かれた八万四千の法門も、究極はお釈迦さまの御心のはずなのだ。各区仏を当番処として十九回目を当高松寺様で厳修される。寺歴六四〇年余り、お古いなあ。当寺涅槃図は文化財に指定されている。こういう古いものが大事にされている。先人たちの伝統を今にまで歩み、生かされている。すばらしい。市仏連涅槃会厳修はみんな仲よく一円相の如し。宗派などは問題外でうれしいなあと思う。世は無常であるから時間を大切にし、けっして他に求めることなく、自分自身をしっかりと燈として、ブッダの教法を依りどころとして絶ゆまず精進努力せよとの釈迦入滅涅槃の遺言を如何に頂戴していくか。今から二三八〇年前の二月十五日黎明、御歳八十で亡くなられた状景がこの涅槃図である。アナンをお伴にインド各地を説法の旅をして、修理に修理を重ねてようやく動いた古い車のように、私の体も老い衰えて疲れた。このクシナガラの沙羅の林に床を敷いておくれ。アナンの伸べた床へ、お釈迦さまは北を枕にして右脇を下に、足を重ねて顔を西方浄土に向けられ静かに横たわれた。いつも言うように愛する親わしい者ともいつかは別れねばならぬと、オロオロとするアナンを喩した。お釈迦さま倒れるの報が風の如く知れ渡って、遠近散在の弟子や信者がわれ先にと集まられる。お釈迦さまは身を少し起こし見渡して、『質問はないか、質問はないか、質問はないか』と発するも、中夜寂然として声無し。最後の声をふりしぼって遺言され、入滅涅槃の相を示された。

晩年のお釈迦さまは世のため人のために尽しなさいという菩薩行をことさら説かれた。どんなささいなことでもいい、良いことと思



仏涅槃図市文化財指定板



横浜市指定文化財涅槃図掛抽

迎春

祈 世界平和

横浜市仏教連合会会長
高野山真言宗海照寺住職
滝川覚道
〒235 磯子区坂下町四―一九
電話 七五一―七一〇四

横浜市仏教連合会参与
神奈川県仏教会長
天台真盛宗新善光寺住職
福永隆昭
〒232 南区三春台一三三
電話 二三一―五七五四

横浜市仏教連合会顧問
真言宗智山派観音寺住職
柳下隆侃
〒222 港北区篠原町二七七七
電話 四三一―一四三四

横浜市仏教連合会参与
曹洞宗西有寺住職
横山敏明
〒231 中区大平町九六
電話 六六一―〇一六六

横浜市仏連税務委員会委員長
緑区仏教会長
高野山真言宗福聚院住職
斎藤隆法
〒226 緑区池辺町二二九六
電話 九四一―一三六六

横浜市仏教連合会御用達
東海ビーエス観光株式会社社長
真川明
〒240 保土ケ谷区西久保町一―四―二―一一八
電話 三三四―三四〇〇

横浜市仏教連合会顧問弁護士
遠藤隆也
〒110 東京都台東区東上野二―一八―七
電話 〇三―八三二―二八一九

横浜市仏教連合会
墓地委員会委員長
臨済宗建長寺派洪福寺住職
奈良光雄
〒220 西区浅間町五―三八六―九
電話 三一一―四六七一

横浜市仏教連合会常務理事
神奈川区仏教会長
曹洞宗本覚寺住職
守長尚文
〒221 神奈川区高島台一―二
電話 三二二―〇一九一

横浜市仏教連合会副会長兼専務理事
臨済宗建長寺派松蔭寺住職
川上敬吾
〒230 鶴見区東寺尾一―一八―一
電話 五七一―一七〇一

横浜市仏教連合会副会長
保土ケ谷旭区仏教会会計監査
曹洞宗長昌寺住職
玄野孝善
〒241 旭区さちが丘五九
電話 三九一―一三七九

迎春

祈 世界平和

横浜市仏教連合会会計
浄土宗浄念寺住職
橋下賢明
〒233 港南区野庭町一八四三
電話 八四二―七二八八

横浜市仏教連合会常務理事
戸塚区仏教会長
臨済宗円覚寺派高松寺住職
西尾俊雄
〒244 戸塚区戸塚町四八六四
電話 八六一―三五二七

横浜市仏教連合会常務理事
保土ケ谷・旭区仏教会長
浄土真宗仏光寺派正円寺住職
楠正舜
〒241 旭区中白根一―一―十一
電話 九五一―二五四〇

横浜市仏教連合会常務理事
泉区仏教会長
曹洞宗東泉寺住職
関水宗孝
〒245 泉区下飯田町七四三
電話 八〇二―八〇九七

横浜市仏教連合会常務理事
港北区仏教会長
天台宗正覚寺住職
八木良純
〒223 港北区茅ケ崎町七八二
電話 九四二―三〇五九

横浜市仏教連合会会報担当
真言宗豊山派西福寺住職
備前恭忍
〒246 瀬谷区橋戸三―二一―二
電話 三〇一―六一三四

横浜市釈尊奉讃会事務局長
曹洞宗東照寺住職
程木徳明
〒223 港北区綱島西一―十三―十五
電話 五三一―一七八三

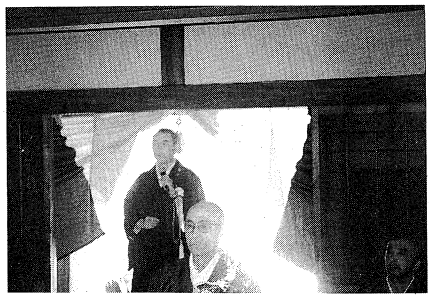
横浜市仏教連合会常務理事
瀬谷区仏教会長
曹洞宗徳善寺住職
尾崎正悳
〒246 瀬谷区本郷三―三六―六
電話 三〇一―〇一九二

横浜市仏教連合会常務理事
磯子区仏教会長
高野山真言宗大聖院住職
鷲雄興勝
〒235 磯子区東町六―二〇
電話 七五一―〇六七二

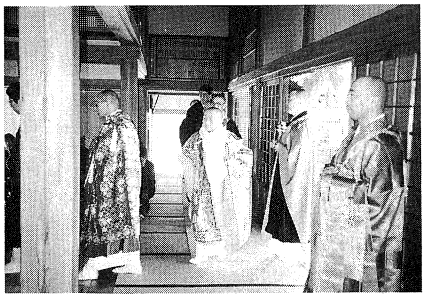
横浜市仏教連合会堂務理事
鶴見区仏教会長
真言宗智山派東漸寺住職
森岡隆沖
〒230 鶴見区潮田町三―一四四―二
電話 五〇一―二三八八

横浜市仏教連合会常務理事
西区仏教会長
法華宗勧行寺住職
都築哲信
〒220 西区南軽井沢九
電話 三一一―三五五七

ったらできるだけ計らいなく、物事を徹底しぶつかっていく一途の行、体験の積み重ねが大切である。我々は自己中心的で、ものを比べるために迷い、悩み苦しむ。しかし人間は苦より楽なほうがいいから、すぐに自分に自分を妥協してしまう。いつまでたっても本物の生き方ができない。今はガンで亡くなられる方が多い。朝日新聞の十月十三日付けの「ガンに立ち向いて生命を見つめる」遠藤ゆき子様（ピアニスト）の手記を読み感動した。この方はピアノ一筋で幼少よりこられ、ヨーロッパの国に留学して、あらゆる賞を受賞された。二十七歳の時に三十八歳も年齢差のある恩師に請われて結婚した。人もうらやむような時期もあったが、先生は八十歳を越えて弱られ寝たきりとなる。自分は実力が増々伴い、レッスンに発表会、



開式の言葉　玄野市仏副会長



入室

芸大講師職、家事と老夫の面倒見とで超過労の生活となった。とうとう緊急入院し、おまけに乳ガンの宣告を受け意気消沈し、自殺を決意し老夫先生の枕元にそっと離婚届けを置き、マンションの一室

雲林寺詠歌講奉詠

から飛び降りようとした時、訪ねてきた友人に出くわし、自殺を思い止まる。ピアノだけは生きがいと主治医に懇願して養生した結果、念願が叶い病床で練習を続けたショパンのピアノ協奏曲に日本の能の世界をアレンジして、一月に発表会をした。ガラッと生き方を変え作務衣を着た淡々とした生活に入った。記事の結びで〔人間本来無一物だ。裸で生れて最後は裸で

式衆着坐　導師酒水加持

帰ってゆく体の仮り物だ。お返ししたと思うと気持が楽になった」。これは効きましたね。これは禅語〔大死一番、絶後に蘇るの態〕である。要は人間の心の受けとめ方である。遠藤ゆき子様が生死のぎりぎりに出くわし、努力精進で逆境を頑張り抜いた。人間が枯れるという無心で計らいのない、ありのままという身の処し方である。春は花、夏は橘、秋は菊、いつも絶え

鉦つき経唱和

せぬ法の花山よ。全て各々因縁があるように天地いっぱいに草木が何の計らいも無く咲いているように。私共もめぐりあわせに対して、いつでも、どこでも素直に精一杯生きよう。行学がなければ本物が

西尾高松寺住職と随喜僧読経

培われない。お釈迦さまの心は、せずにはいられない慈悲の眼差しがどうしても出てくる。人間の価値はどこで決まるか。〔随処に主となるの態〕。時には全力疾走や泥まみれ、埃だらけになっていく〔灰頭土面（かいとうどめん）〕の世界が人間の価値をきわめていく目方であり、いやが応でもほんわかして体がスッと整ってくる。これを〔薫翌（くんじゅう）〕と云う。

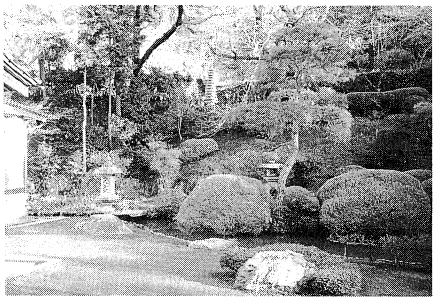
吉水西蓮寺住職と式衆読経

ある方の詩に「語る人尊し、語るとも知らで体で語る人さらに尊し、導く人尊し、導くとも知らで後ろ姿で導く人さらに尊し」。何も云わなくもいい。その人を見るだけで魅せられてゆく。普通の生活の中では伊達や酔狂で芽生えっこない。だから根本は世の為、人の為の一途の行から出てくる。お釈迦さまは本当の幸福、究極の喜びの一端をとことん生きながらにして

実地に證明された証し人なのである。決してあの世の世界を話題にして迷い、取り越し苦労するものではないと説くのが仏法である。私共の寺に仏教詩人の坂村真民さんの詩碑が在る。「二度とない人生だから一輪の花にも無限の愛を注いでゆこう、二度とない人生だから一匹のコオロギでも踏み殺さないように歩いてゆこう、どんなに喜ぶことであろう……」。

今の世の中、嫌な不景気風が吹いている。だが正直なところ良かったなあと思うのは心豊さ、地に着いた生き方が尊ばれていくような気がするからである。以上、涅槃会のご縁をいただきお話を申し上げた。皆様どうぞ元気で生きていただきたい』

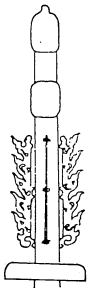
講演拝聴の参詣者



高松寺書院前禅庭と心字池

事務日誌

6 1 19　三役委員長会議　於くらち
6 1 20　連発　会報原稿依頼
6 1 23　連発　県慰霊堂奉仕案内状
6 2 2　連発　奉讃会だより配布願い
6 2 7　戸塚区仏三役第二回打合会　於高松寺
6 2 11　第十九回涅槃会　於戸塚高松寺
6 2 16　会報原稿〆切日
6 2 24　会報三十八号編集於長昌寺
5 11 5　三役会　於四川飯店
5 11 9　連発　理事会案内
5 11 15　戸塚区仏三役涅槃会合同打合会　於戸塚高松寺
5 12 11　理事会　於桂月
6 1 10　連発　涅槃会案内状配布願い
6 1 11　連発　涅槃会講師依頼状
6 1 12　連発　涅槃会随喜願
6 1 12　連発　三役委員長会議案内状



編集後記

◎当市仏連会と釈尊奉讃会の諸活動は地味ながらも着実に仏法興隆と済世利人に寄与していると思う。

◎滝川会長の年頭ご挨拶、玄野副会長の九州慰霊の旅感想文、川上専務理事の事務報告等に諸役の当会運営への真摯な取り組みが感ぜられる。

◎九州慰霊の旅は風光明媚な景色をみる楽しみとは裏腹の悲惨な戦争の歴史も見聞し、やりきれない重い気持になった。仏陀の慈悲の御心の実践を誓い、懺悔と平和を祈念する同行八十名であった。

◎第十九回の釈尊涅槃会が戸塚区高松寺様を会処として営まれた。事前に二度準備のために市仏と区仏の合同役員会を持った。戸塚区仏と高松会の皆さまのご努力、ご協力に心より感謝を申し上げます。翌十二日の未明の降雪が、横浜では八年ぶりの二十二センチも積る大雪となり、交通の混乱が起きた。一日違いの晴天で涅槃会が盛況裡に無事執行されていたことを思い、改めてホッと安堵している。

◎区仏のたよりを郵送され、又は持参くださり、ありがとうございました。それぞれ特徴のある活動報告はお互いの励みと参考になると思う。今年も会報発行への寄稿協力を宜しくお願い申し上げる。

◎平成六年・一九九四年・甲戌も早や二月下旬となり、やっと当会報の編集を済ませた。ノルウェーのリレハンメルで冬期オリンピックが二月十二日に開催された。サマランチ会長がサラエボ内戦に言及し、銃を捨て平和の祭典に参加をと呼びかけた。IOCが唱えた「五輪休戦」も結局は、ボスニアでは実現しなかった。